朽木開発援助政策論 2008 年 5 月 30 日　　Copyright：Takumin

中国：産業政策　　幼稚産業保護

グローバル化の背景においては、競争政策の方が産業保護よりも優位することの方が多い。しかし福田首相は産業保護寄りで、小泉首相が競争政策寄りである。

マレーシアの話。１９７１年に新経済政策というのが採られ、いわゆるブミプトラ政策（土地の子政策）である。これはつまりマレー人優先の政策である。なので、これは競争に相反する政策であった。貧困撲滅・社会の再編ということで、ジャングルを伐採して開発を進めていた。他の国の人も労働などの目的で暮らしているので、マレー人優先という政策は非現実的な側面もあった。

ルック・イースト政策がある。これは日本を見習う政策と言う意味である。これはマハティール首相が提唱した。重化学工業化を目指すものであった。重化学とは、日・韓・中で盛んな鉄・石油・自動車・化学を指す。国が育成していこうというものである。この政策がうまくいったかというと、ほとんど失敗に終わった。ミャンマーでは保護政策はダメだった。では生き残る産業とは何なのか？？日本でも日産という生き残った産業もゴーンさんのものになった。

前にも言ったが、保護政策には補助金や関税などがある。例えば日本のめがねが 1000 円、中国のめがねが 500 円。この両者を競争させるためにはこれに何%の安税をかけたらよいだろうか。つまり中国のめがねを 1000 円にするためにはどうしたらいいだろうかということなのだが、関税を 100%かけると 1000 円になりちょうど良いということになる。これが保護である。これらがだめだったというのが、IMF や世界銀行の話。主な被害者としてはアジア。

1985 年に不況になるが、それには理由がある。まず一つは、産業政策によって財政赤字が発生する。そして第二に、パーム油の価格が減少する。そして第三にアメリカの景気が悪化すると言うこと。この不況に関してはプラザ合意がなされた。そして 1986 年に、外資導入政策というのを始めた。マレーシアがどういう政策を採ってきたかが日本を動かす面もあるので全く無関係の話ではない。いまはジェトロが引っ張っているが、なかなか良い結果は出ない。行っているものの内容は、自由化や規制緩和であり、これは競争を意識した

ものである。というか競争政策寄りのものであるが、これが大成功する。これによってマレーシアはアジアの電気電子産業の基地となる。ということで、これが第一次マスタープランと呼ばれた。

91 年総合計画
96 年第二次マスタープラン
高度成長
97 年アジア通貨危機に見舞われる。

輸出が減少。停滞。←すそ野産業の欠如に見舞われる。すそ野産業とは部品や金型の産業のこと。金型産業というのは日本の中心産業であるものつくりのようなもの。結構重要だと言うことが分かるだろう。こういう産業の技術者は育てるのに 10～15 年かかるので、跡継ぎがいないという問題に直面することになったのである。ということで欠如するという問題に直面した。ということで、すそ野産業というのは基本技術みたいなものね。

ここから産業クラスター政策が採られることになった。

練習問題をやったので、今までのまとめ

保護政策：輸入代替政策
それまで輸入していた工業製品に「高い関税」をかけ、輸入を難しくし、国内にその製品を生む産業を興す。ミャンマーにおける繊維産業がその例。

競争政策：輸出指向（export-oriented）工業化政策

国内販売を目的とする製品よりも、輸出可能な製品（イチローやダイスケとかね）を工業化するもの。

今の日本で輸入代替政策に相当するものはないだろうか。米はどうだろう。先生は知らない。メガネは？？？